



Title	荒れ地に花
Author(s)	岩根, 久
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2012, 13, p. 61-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70339
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

荒れ地に花

岩根 久（大阪大学 大学院言語文化研究科 言語文化専攻）

フォーラムというのはもともと古代ローマの共同広場のことだ。Forum は古代ローマの公用語ラテン語ではフォルムと発音しフォの音は短い。原音に忠実にというならフォルムが正しいが、何でも原音主義というのは問題がある。フォルムはカタカナ語として形態という意味が定着しているので、「サイバーメディア・フォルム」では何のことかわからない。

もちろん「サイバーメディア・フォーラム」のフォーラムは比喩的なものであることは百も承知の上で、あえてサイバーメディアセンターのフォーラムはどこかと探すと、豊中教育研究棟北側の飲料自動販売機などが置いてあるスペースがいかにもそれらしい。せっかく広場があるのだから組織を挙げてここでイベントをやったら楽しいだろうなあ。無制限一本勝負のバトルなどはさぞ痛快であろう。さて贅言は措くとして、この広場の一角に花壇のような個所があり、春にはここにナガミヒナゲシのオレンジ色の花が咲いていた。花壇の「ような」と言うのは、恐らく花壇として予定され土は入れたものの、後はそのままになっており、こぼれ種で自然に芽生えた植物のひとつの楽園になっているからだ。このナガミヒナゲシは、一見すると荒れた地面に健気に咲いているように見えるが、国立環境研究所の「侵入生物」にリストアップされているほど繁殖力の強い帰化植物であり、「健気」という形容は相応しくないかもしれない。それでも、豊中教育研究棟で行われる CALL 授業でここの前を通るたびに、その健気で可憐な佇まいに心をなぐさめられたものであった。やがて業者の人たちによる草刈りが行われて、ナガミヒナゲシは姿を消してしまい少し残念である。各部局が一定の時期に行っている草刈りでヤブガラシやヘクソカズラなどがいつの間にか無くなっていても残念に思わないのに、可憐だと思えるものが無くなると残念がるのは勝手なものだ。

今年は4クラスで CALL 教室を使わせていただいている。そのうちの3クラスは豊中教育研究棟の

CALL 教室だったので何の問題もなく1学期を終えたが、1クラスは共通教育 A 棟3階にある CALL 第5教室（A315）だった。諸般の事情で本年度の4月から共通教育 A 棟にある CALL の2教室、すなわち CALL 第5教室（A315）と CALL 第6教室（A304）には全くメンテナンスが入っていない（これは公的にメンテナンスされていないということで、実際は授業に支障がでないよう可能な限りのサポートはしていただいている）。

メンテナンスが入っていないと何が困るかという点で、端末機が物理的に障害を持った時、修理などの予算措置がなく、その端末機はずっと障害を持ったままになるという点だ。CALL 第5教室は生徒機の台数が55台。この教室を利用する木曜2限目フランス語初級 I（初級文法の授業）の受講者は38名なので、生徒機の障害に対しては席が変わるなどすれば、何とか対処が可能である。問題は教師機、これは1台しかない。実際 CALL 第5教室の教師機は、故障はしていないものの挙動に問題がある「病気持ち」で1学期の間ずっと悩まされた。

CALL 第5教室がメンテナンスなしだということは3月に入ってから知った。なので、授業開始前にまず教師機をチェックした。教師機を立ち上げた時「ファイルシステムに異常があります。復元設定を「停止」に変更する。もしくは本製品をアンインストールしてから、至急チェックディスクを実行して下さい。」という不吉なエラーメッセージが出たが、どうしようもないので OK ボタンをクリックし、ログオン画面へ。ところで、マシンに電源を入れてログオン画面までの1分少々はまあいいとして、ログオンにやたら時間がかかる。短いときで5分、長いときで8分以上かかるのには閉口した。

文法の授業は、時間に余裕がなくて90分を目いっぱい使う。授業は定刻に開始し、本当は質問の時間を残して授業を終了したいのだが、それもできないことが度々ある。そんな訳で、少なくともチャイム

が鳴ると同時に、欲を言えばチャイムが鳴る前に学生達にはログオンして欲しい。授業の開始後 5 分から 10 分間は筆記による復習テストをするので、その間にログオンが完了していれば、そのあと毎回行っている Web を用いた練習に間に合い、授業がスムーズに進行する。

8 時半には自動的に端末機の電源が入っている豊中教育研究棟の教室とは違い、CALL 第 5 教室で定刻の 10 時 30 分から授業を始めるためには、上に述べたように教師機が「病気持ち」なので、少なくとも 10 分以上前に教師機の電源を入れ、ログオン、Calabo あるいは Sky Menu（いずれも CALL 用の生徒機をコントロールする教師機用のソフトウェアであるが、両者の機能は微妙に違っている）を立ち上げ、生徒機の一斉起動を行う必要がある。木曜日は CALL 第 5 教室の 1 限目の授業がなかったし、私も 1 限目の授業がなかったので、10 時に教師機の電源を入れ、だいたい 10 時 10 分ごろに生徒機が立ち上げを終了、すべての生徒機のチェックを行って障害を記録、必要に応じて手動で生徒機の電源を入れ、授業に備えるのが木曜の朝の日課になった。

一番心臓に悪いのは、「病気持ち」の教師機が授業の最中にブルー画面になりその後再起動する、という現象である。いつ起こるか分からないし（教師機の機能を駆使しているときに起こることが多い）、ひとたび教師機が再起動すれば、現状復帰までほぼ 10 分はかかるので、余裕のない授業がますます余裕がなくなる。授業のベテランなんだから授業中何が起きても動揺せず対処する、というのが理想だけれど、この現象が起これるとやはり動揺する。とはいっても、何度かこれを経験すると（そんな経験はできれば無い方がいいのだが）、だんだん慣れてきて、「今日はこのひと（教師機のこと）寝不足みたいですわね、居眠り始めました。いったん居眠ると 10 分は目が覚めないの、その間は別のことをしましょう」などと言えるようになった（動揺を隠して）。

授業が回を重ねるにつれて、学生達の方もこちらの四苦八苦がわかるのか協力的になってくれて、授業の雰囲気は大変良くなった。ついでに成績も伸びてくれたらいいのだが、授業の雰囲気と全体的な成

績、つまりクラスの平均点は必ずしも連動しないようだ。具体的に期末テストの点数分布を見てみると、高得点の学生も多い反面、低得点の学生もかなりおり、クラスの平均点を下げている。雰囲気がいいと勉強意欲がわいて進んで勉強する学生がいる一方、何だか安心して勉強しなくなる学生も出てくる、ということなのか。とにかく、授業がやりやすいのは良いことで、1 学期に低得点だった学生達に的をしばって 2 学期の授業を工夫していこうと思う。

こうして 1 学期を終わって見ると、他の CALL 教室に比べて CALL 第 5 教室は問題をかかえているものの、それほど悪くない授業ができたのではないかなと思っている。ずっと平穏無事な状態が続くより、多少の困難があった方が、結果は良いことがあるのかも知れない。普通の日のビールより、やっかいな仕事が幾つもあって何とかやり遂げた日のビールが美味しいようなものだ（比喻が的外れかも知れませんが、すみません）。

今回こうして「サイバーメディア・フォーラム」に原稿を書く機会に恵まれたので、この 1 学期に CALL 教室で経験した特殊な体験について書こうと思った。多分、誰の参考にもならないけれど、事実の記録の役割を果たしてくれれば良いかと思う。